現場の臨床医として感じる「医療DX」の理想と現実

SCORE 現在 50点 » 5年後 80点

医療法人仁泉会 MIクリニック | 三原直樹

医療DXは医療の効率化やデータ活用を目的とするが、政策の理想と現場の実感には大きな隔たりがある。導入負担、業務乖離、IT人材不足が課題である。成功例であるフィルムレスPACSのように、現場が即効性のある利益を実感できる仕組みが不可欠である。医療情報学の専門家が現場とITの橋渡し役となり、属人知の形式知化と標準化を進めることが、持続的な医療DX推進の鍵である。

Japan's healthcare digital transformation (DX) aims to enhance efficiency and data utilization through standardized electronic records, PHRs, and RWD. However, a large gap persists between policy ideals and frontline realities. Many institutions face challenges such as system costs, workflow disruption, and lack of IT literacy. Successful cases like filmless PACS show that DX must deliver immediate, tangible benefits to clinicians. Sustainable progress requires "translators" who bridge medical and IT domains—professionals in health informatics who can design realistic systems rooted in daily practice while promoting knowledge standardization and equitable data utilization.

医療DXの旗振りと現場の実感

近年、国は「医療DX」を大きな政策課題に掲げ、電子カルテ情報の標準化、マイナンバーカード保険証の普及、PHR（Personal Health Record）の整備、さらにはリアルワールドデータ（RWD）の利活用まで、次々と施策を打ち出している。こうした方向性そのものに異論は少なく、「医療の効率化」「患者サービスの向上」「研究・政策立案への貢献」といった期待は社会的にも大きい。

しかし現場に身を置く医療者からすると、その温度感には大きな隔たりがある。医療DXが謳う理想像と、日常業務に直結するリアルな課題との間には、しばしば「ギャップ」が横たわっている。現場では「かけ声先行」「負担増」「実感なき改善」といった声も少なくない。なぜこの温度差が生まれるのかを、医療者の視点から整理し、理想像に到達するための処方箋を挙げてみたい。

医療現場が直面するリアルな課題

1. システム導入コストと労力

大規模病院ならまだしも、中小規模病院や診療所では、新しいシステム導入に必要な初期投資や維持費は重い負担となる。さらに複数ベンダー間での互換性不足やサポート体制の差が現場の不安を増幅させる。

2. 業務フローとの乖離

紙文化が根強く残る医療現場では、新しいシステムが既存のフローと噛み合わ